

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

大町高等学校

飯田高校 杉山昭久先生寄稿 山岳班夏合宿④ (8/4~8/9 : 4泊5日)

農鳥小屋の「名物父ちゃん」は厳しくも優しかった

(5日目：北岳山荘露营地～北岳～尾池小屋～広河原) 午前3：00丁度に出発。生徒も5日目となると、手際が良い。見上げれば満点の星。周りのテントの登山者は誰も出発の気配がない。ヘッドランプの灯で足元を照らしながら、ゆっくり高度を稼ぐ。テント場を見下ろせば、何張りかのテントに灯りがともっている。間ノ岳方面の登山道にも何人かのヘッドランプが動いている。午前4：00、八本歯のコル中尾根分岐。あたりはまだ暗い。西に目を転じると、尾根筋の頂上付近にオレンジ色の明かりが見える。中ア、千畳敷ホテルの灯りだ。だとすればその下に見える灯りの街は駒ヶ根市だ。小林Tの故郷。

4：30山頂。生徒1人、1人と握手を交わし頂上へ促す。東の空が紅く染まりだした。なんという光景だろう。日の出前、八ヶ岳連峰、鳳凰三山、関東平野から駿河湾方向、富士山まで赤いシルエットを背景に浮かんでいる。頂上に立つ10人の若者の黒いシルエットが、紅く染まった地平線に見事に映える。この素晴らしい紅色彩の中、日本第2位の高峰北岳(3192m)の山頂を我々13人が、独占している。午前4：56 紅く染まった地平線から真っ赤な太陽が



顔を出す。少年たちの顔を紅く染める。重い荷を背負い、5日間も道のりを思い返すかの様に無言で見つめる。苦しみながら登って来た者だけに与えられる特権だ。気が付けば15、6人ほどの登山者も、この光景を楽しんでいる。5：10、出発。360度の見事な展望を楽しんだ後、下山にかかる。南に目を転ずれば、4日間、自らの足で踏み跡を残してきた三伏峠からの道程が、はるか彼方にかいま見える。生徒らは、感慨深げに自分たちの足跡を見つめていた。両股分岐から肩ノ小屋方面へ。小屋でトイレ休憩。小太郎山分岐を過ぎ、大樺沢ではなく、御池小屋方面を下山する。北岳バットレスが朝日を浴び輝いている。今日は土曜日。北岳に向かう多くの登山者と出会う。中には20～30人のツアー登山のグループにも会った。

昨今、登山ブームの波が押し寄せているように感じる。10年ほど前は中高年の登山者が多く見られたが、ここ2、3年、男女のカップル、男性や女性だけのグループ(山ガール・山ボーイ)といった若い世代の登山者が目につく。それも最近の派手なスタイルで。皆かっこいい。健全で良いと思うのは自分だけか。草すべりを下り、7：30 御池小屋着。確かに新しさを感じる小屋だ。ここで、時間調整を兼ね大休止。顧問から、

生徒へ1ヶ500円のソフトクリーム。頑張ったご褒美。90分ほど休憩の後出発。

下山途中、「わっ」と叫び声がし、1年生が足を踏み外し2mほど滑落。落ちた瞬間、自分も、とっさに本人の腕をつかまえながら滑落。しかし、2人共、擦り傷程度で難なきを得た。

小林T、膝の調子がここにきて思わしくなく、途中、小林Tの荷を分け、空身で下る。右ひざに力が入らないという。42.195kmのフルマラソンを経験したことのある小林Tであるが、その影響がここにきて出たか・・・？ 急な下りだ。時間をかけてゆっくりと下る。ようやく、大樺沢からの登山道と合流。今少しだ。野呂川にかかる吊り橋を渡り、広河原に到着(11:00)

4泊5日 三伏峠からの道のりは決して近くはなかった。昨年のこの合宿は散々であった。三伏～高山裏～荒川前岳～赤石～兎～聖(4泊5日)とつないだが、2日目の朝と下山日を除き3000mの頂きはすべて雨と風の中。生徒たちにとって試練の5日間だったに違いない。今年は天候に恵まれた。特に北岳山頂での感動の一瞬は、生徒たちの心に、言いようのない何かを刻んでくれたに違いない。

大河原～北沢峠～仙流荘～高遠～伊那市とバスでつなぎ、飯田線に乗車。4泊5日の合宿はここで終了です。(文責：杉山昭久)



編集子のひとごと

夏の短い信州の夏休みは短い。小生の勤務校大町高校はすでに先週の水曜日から新学期の授業が始まっている。実際、夏休み開始が7月29日、体験入学や補習授業で8月第1週がつぶれたことに加え、559号にも記したように小生自身が、IHに行かねばならなかった事情もあり、今年のように条件のいい年だったにも関わらず、一番いい時期を逃してしまった。11日に帰長、12日準備で13日入山。最大でも3泊4日までの合宿を組むのがやっとだった。その3泊4日でも様々なドラマがあった。その報告は追い追いつかせていただくつもりであるが、いろいろなドラマがあった。

天気にも恵まれた飯田高校の報告を読ませてもらって、やはり高校山岳部の一番の目的は夏山合宿だと思った。

もう一つ、小生自身は8月13日から16日までの合宿後、17日、18日の両日、日本山岳協会の普及指導部のジュニア登山教室「てっぺん目指してみんなで登ろう」のお手伝いで小学生や中学生とクライミング体験と、立山登山をしてきた。この取り組みもすでに今年で6回目。参加者の中には第1回から欠かさず参加している中学生もいる。長山協でもジュニア登山教室を継続的に開いて、少しずつ定着してきている。そんなところを見るにつけ若い層の登山への回帰の流れは確実に起きていることを実感する。小さい一石ではあるかもしれないが、継続は力なり、投げ続けることに意味がある。確実に将来の登山者を育てる一助となることのお手伝いならいくらでもしよう。(大西 記)